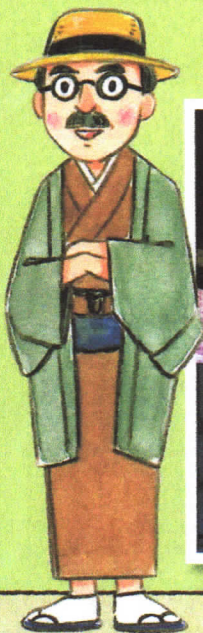


昔の道具

うつりかわり 事典

監修:三浦基弘



小峰書店

かさ

明治時代 1912年 大正時代 1920 1926年 昭和時代 1930 1940 太平洋戦争 1950 高度経済成長

和がさ



洋がさ



1880年ごろ 洋がさが国産化される

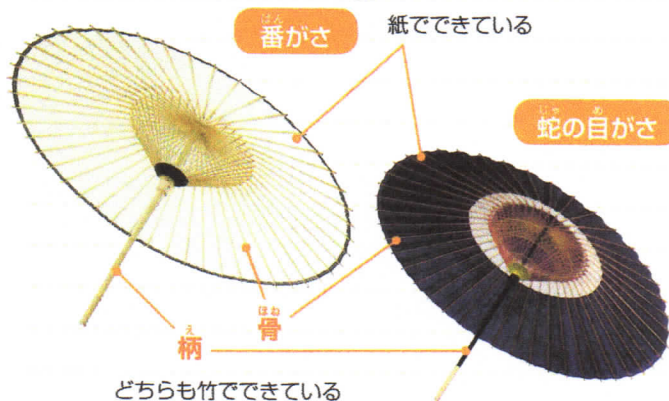
洋がさは、おしゃれで便利な道具として広まった

1954年 折りたたみがさが広まる……★

1960年 ワンタッチがさが登場



和がさを使っていた



番がさをたたんだところ

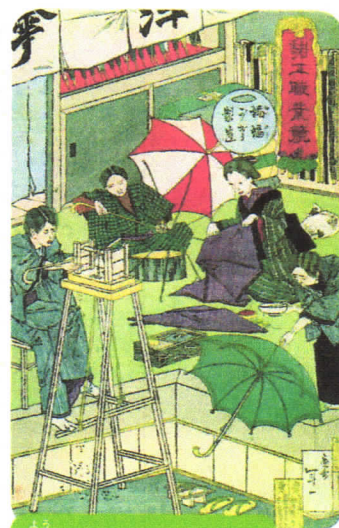
昔、日本で使われていたかさは、紙でできていたが、水をはじくために、カキの実からとる「柿渋」や、植物の油を紙の上にぬっていた。番がさはふだんに使われ、蛇の目がさは女の人のおしゃれに使われた。「蛇の目」という名前は、色のちがう2枚の紙をはりあわせたようですが、ヘビの目のように見えるからだ。



洋がさが登場した



洋がさをさした人



洋がさをつくるようす

(1879年の絵)

黒くて、開いた形がコウモリに似ていたから「こうもりがさ」ってよばれたのよ。



- 紙でできていたが、水をはじくために、カキの実からとる「柿渋」や、植物の油を紙の上にぬっていた。
- 番がさはふだんに使われ、蛇の目がさは女の人のおしゃれに使われた。「蛇の目」という名前は、色のちがう2枚の紙をはりあわせたようですが、ヘビの目のように見えるからだ。

- 洋がさはヨーロッパから伝わったかさで、和がさでは紙だった部分が布、骨の部分が金属でできていた。
- 洋服とともに、だんだんに広まった。ただ、多くの人にふつうに使われるようになったのは50年ほど前からだ。